

JBCC



Datamart
for WebReport 2.0

チュートリアル

日本ビジネスコンピューター株式会社

■ ごあいさつ

このたびは弊社製品 Datamart for WebReport2.0 をご購入いただきまして、誠にありがとうございます。

(以下、Datamart for WebReport2.0 を「本製品」と呼び、ご説明して参ります。)

本製品は、基幹系や情報系のデータベースにある様々なデータをデータマートへ転送するデータ転送ツールです。

本書は、本製品の操作に慣れていただくためのチュートリアルです。

なお、表示画面などは操作の一例として掲載しているものです。お客様のご使用環境によっては、画面に表示される内容が異なる場合がありますので、ご了承ください。

■ 著作権／ご注意

本書に記載されている会社名、製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。



本書の内容の一部または全部を無断で複製転載することを禁じます。

本書に掲載の内容および製品の仕様などは、予告なく変更されることがあります。

本書の内容は万全を期して作成しておりますが、万一ご不明な点や誤り、記載もれ、乱丁、落丁などお気づきの点がございましたら、弊社までご連絡ください。

Copyright © 2009 JAPAN BUSINESS COMPUTER CORPORATION. All rights reserved.

■ 本書の表記方法について

	ハードウェアやソフトウェアの損害やエラーの発生を防止するために、必ず守っていただきたい情報を記載しています。
	特定のテーマに関する補足情報を記載しています。
メニュー、アイコン、ボタン、ウィンドウ、タブ	[] で囲んで表記します。 (例) [OK] ボタンをクリックします。
キーボード上のキー	<> で囲んで表記します。 (例) キーボードの<Tab>キーを押します。
参照先	章、節、項は『』、見出しは「」で囲んで表記します。 (例) 『2章1 ログインとログアウト』を参照してください。

目次

■ ごあいさつ	i
■ 著作権／ご注意	i
■ 本書の表記方法について	i
目次	ii
第1章 はじめに	2
はじめに	3
本書について	3
実習いただく前に	3
第2章 - 基本編 -	4
2-1:データ転送定義を作成する(RDB)	5
2-2:データ転送定義を作成する(File)	15
第3章 - 応用編 -	25
3-1:オリジナルテーブルを作成する	26
3-2:オリジナルファイルを作成する	33
3-3:スケジュールを作成する	38

第 1 章

第1章 はじめに

はじめに

本書について

本書では、本製品の基本操作や、より便利な機能の使用方法について手順を追って紹介しています。実際に製品を操作しながら読み進めていただくことで、よりいっそうご理解いただくことができます。



本製品名と一般用語の混同を避けるため、本製品名“Datamart for WebReport2.0”は“本製品”と記載し、一般用語の“データマート”は“データマート”と記載してまいります。

実習いただく前に

次の点にご注意ください。

- 運用中データ（本番業務データ）を利用した実習は推奨できません。実習には本書サンプルデータをご利用いただくか、またはお客様ご自身でサンプルデータをご用意ください。
- 実習の結果生じたデータ破損やデータ環境および運用中のデータ転送定義等への障害については弊社では責任を負いかねます。よって、影響を避けるために本書で利用する様々なデータや設定、生成物等（転送定義データなど）については本書でのみ利用するとの前提のもと、ご説明を進めてまいります。

第 2 章

第 2 章 - 基本編 -

2-1: データ転送定義を作成する(RDB)

ここでは RDB リソースに対してデータの読み取り/書き込みを行うデータ転送定義の作成を習得します。

読取ったデータはフィルタを利用してデータの加工を行った後、対象のデータベースへ挿入します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none">・ RDB リソースを利用しデータの読み書きをする・ フィルタを利用してデータ加工をする	<ul style="list-style-type: none">・ データ転送定義

● 事前修了しておきたい実習項目

ありません。

● 実習のシナリオ

“東日本 DB” データベースの“商品マスター” テーブルからデータを読み込み、

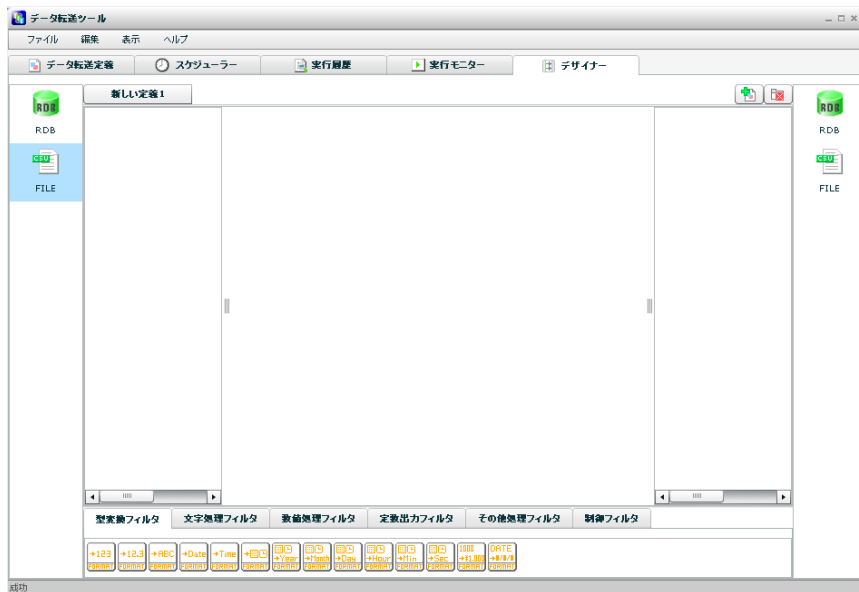
“西日本 DB” データベースの“商品マスター” テーブルへデータを新規挿入/更新します。

商品マスターには単価フィールドがありますが、西日本では東日本より 5% 高く設定します。

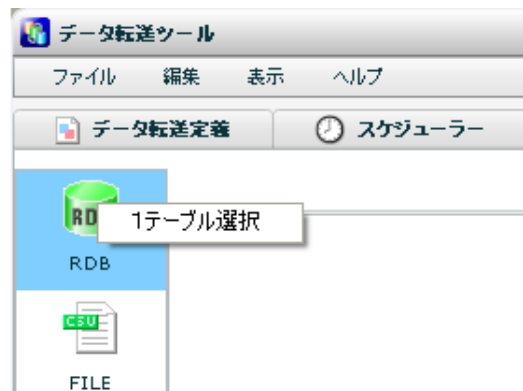
作成したデータ転送定義を保存しテスト実行を利用して検証した後、手動で実行します。

手順1: DatamartTool を起動し [デザイナー] タブを選択します。

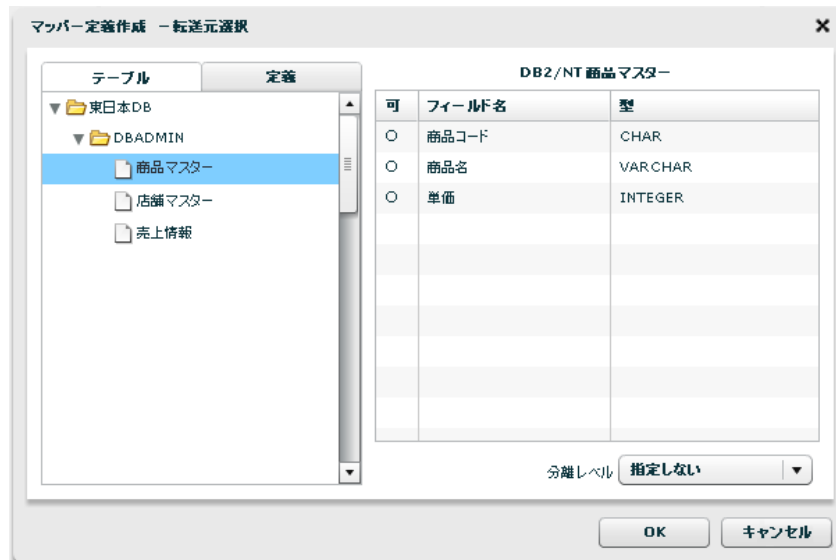
入力元（データ読み込み側）と出力先（データ書き込み側）には RDB を利用します。

**手順2: RDB から入力元テーブルを選択します**

まず、入力元ではデータの読み込み先であるデータベースのテーブルを一つ選択します。



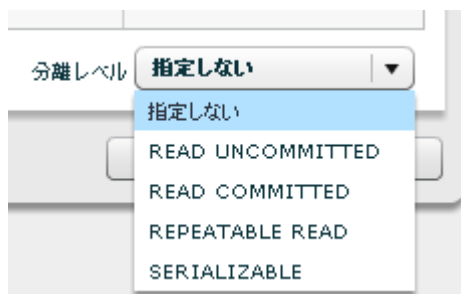
[RDB]と書かれたアイコンを右クリックし[1 テーブル選択]をクリックします。



表示されているフォルダ名は、CV/BI 管理ツールで付けられたデータベースの論理名です。目的のデータベース | スキーマ名と選択し、データを読み込みたいテーブルを選択します。

画面右側には選択したテーブル情報が表示されています。目的のテーブルかどうかを判断します。

ここで分離レベルを選択します。この実習では分離レベルは既定値の[指定しない]を指定します。



[OK]ボタンをクリックし転送元選択画面を閉じます。

! 実際の運用ではデータの特性に応じて適切な分離レベルを選択してください。

手順3： RDB から出力先テーブルを選択します

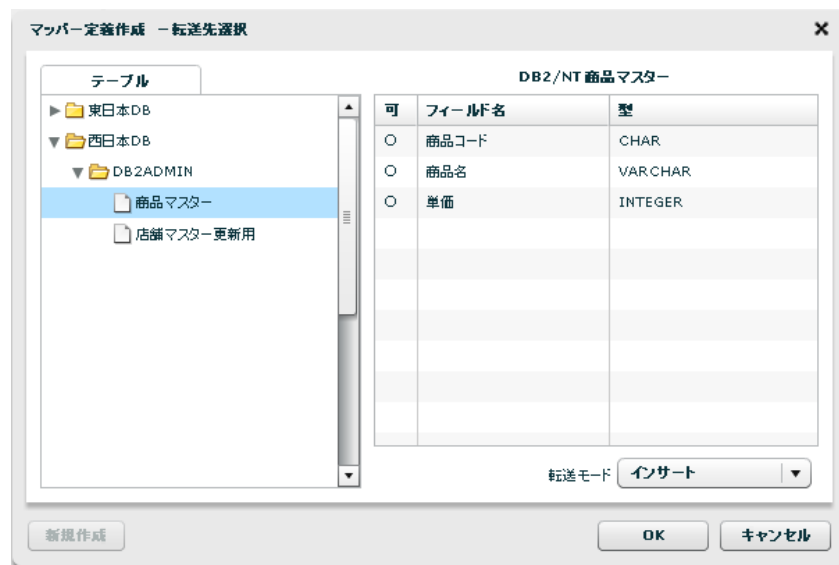
データの出力先テーブルを選択します。

手順2では“東日本 DB” からデータを読み込むよう設定しました。手順3では出力先として“西日本 DB” に取得したデータを転送するように指定します。

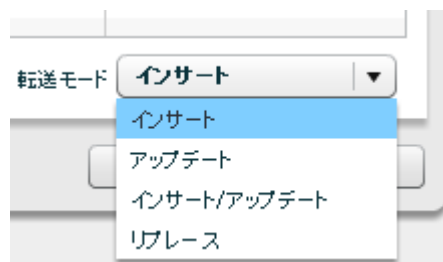
画面右側の[RDB]アイコンを右クリックし[1テーブル選択]をクリックします。



[転送先選択]画面で“西日本 DB”を選択し“商品マスター”テーブルを選択することで転送先を指定します。



[転送先選択]画面では、転送モードを指定します。この実習では[インサート/アップデート]を選択します。



転送モードは次から一つ選択します。

- ・ インサート : データの新規挿入
- ・ アップデート : 更新キー指定によるデータ更新
- ・ インサート/アップデート : 更新キーが一致する既存データは更新し、それ以外は新規挿入
- ・ リプレース : 対象のテーブル内のデータを全て削除した後、新規挿入

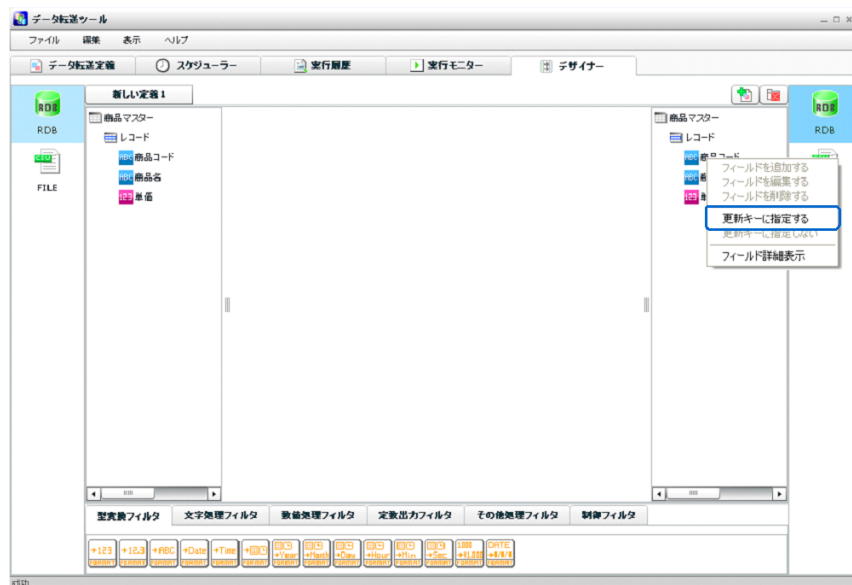
[OK]ボタンをクリックし転送先選択画面を閉じます。

手順4: データマッピングをします

入力元と出力先のそれぞれのデータフィールドをつなぎ、データ転送設定をします。

手順3で転送モードを[インサート/アップデート]を選択しました。転送モードにアップデートを含む場合更新キーを指定する必要があります。

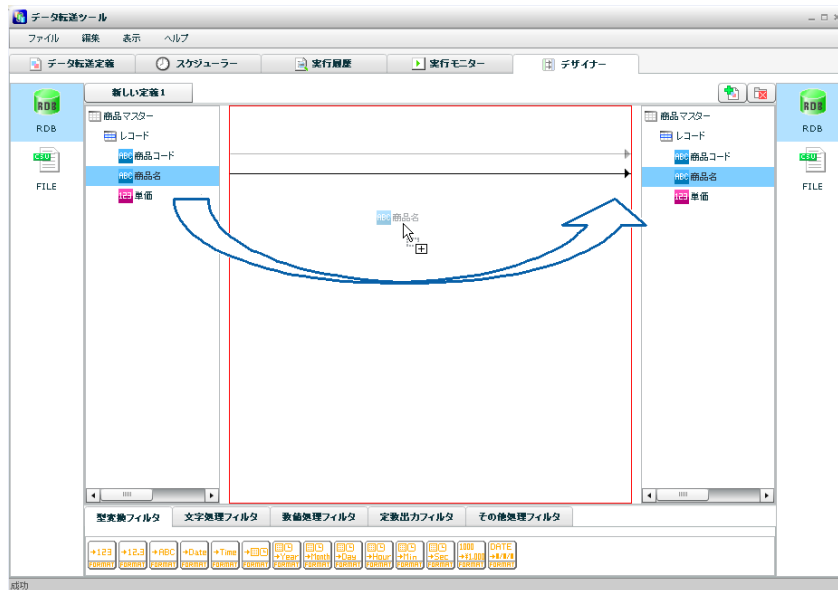
出力先のフィールドのうち、更新キーとなるフィールドを右クリックし、メニューから[更新キーに指定する]をクリックします。入力元と出力先で一致する更新キーが見つかった場合は更新し、一致しないデータの場合は新規に挿入されます。



出力先に主キー設定があるにも関わらず更新キーを指定しなかった場合や、転送モードが[インサート]である場合などに同一のキー値を持つデータを転送しようとするとき一意キー違反が発生する場合があります。この場合、本製品はエラーを記録し場合により処理が停止します。

更新キーは忘れずに必ず指定するようにしてください。

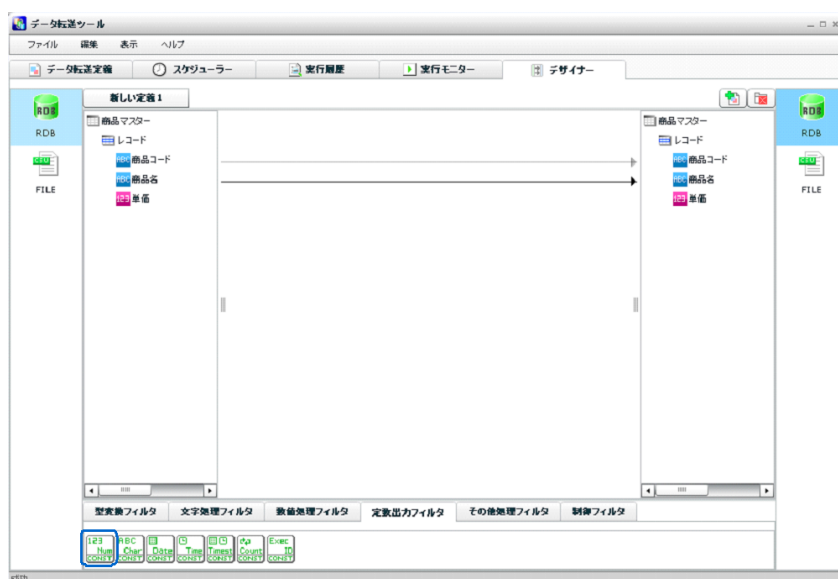
この実習では“東日本 DB の商品マスター” から“西日本 DB の商品マスター” ヘデータを転送することです。そのためには画面左側のフィールドを、右側の同名のフィールドに対してマウスでドラッグ&ドロップしマッピングを一つひとつ作成します。



単価フィールドは西日本のほうを5%高く設定したいため、東日本 DB の単価にその分上乘せした値を西日本 DB の単価フィールドにマッピングします。

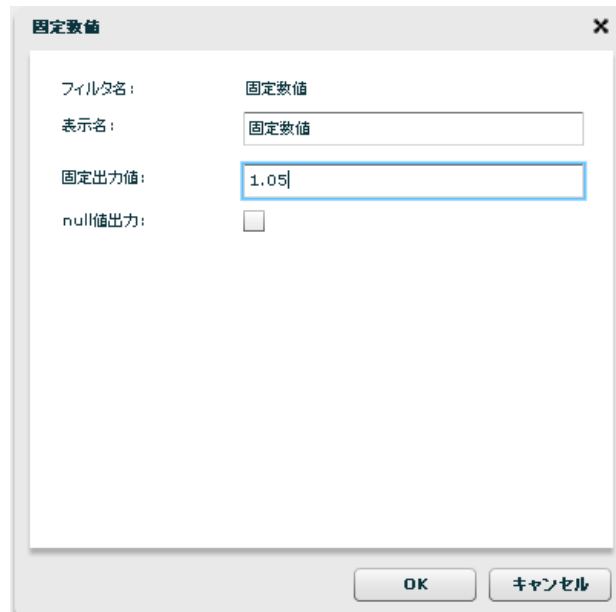
このマッピングには“5%”という値を持たせた固定数値フィルタと、掛け算フィルタを利用し表現します。

まず、画面下部の[定数出力フィルタ]タブを選択し、[固定数値]フィルタを画面中央のキャンバスにドラッグ&ドロップします。

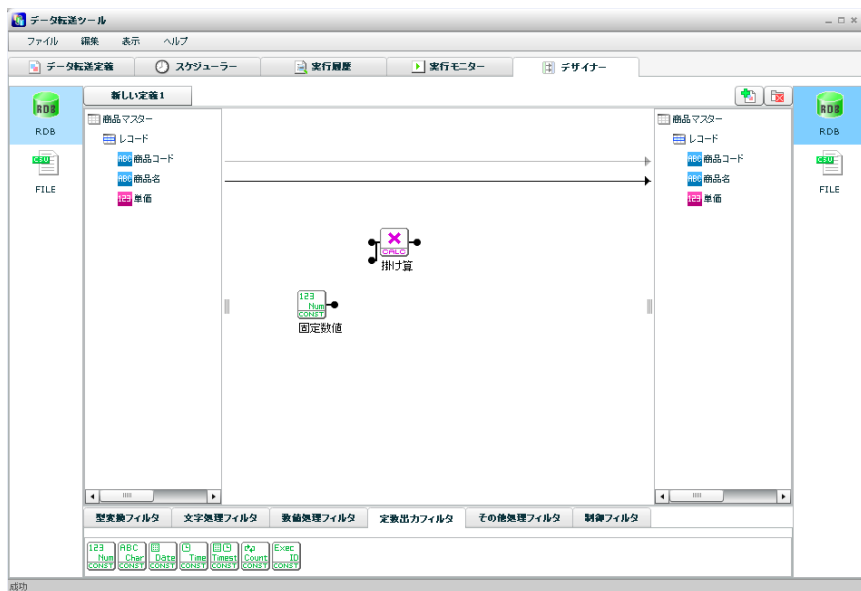


[固定数値]フィルタを配置すると次のようなプロパティ画面が表示されます。

[固定出力値]欄に5%である“1.05”と半角で入力し、[OK]をクリックします。

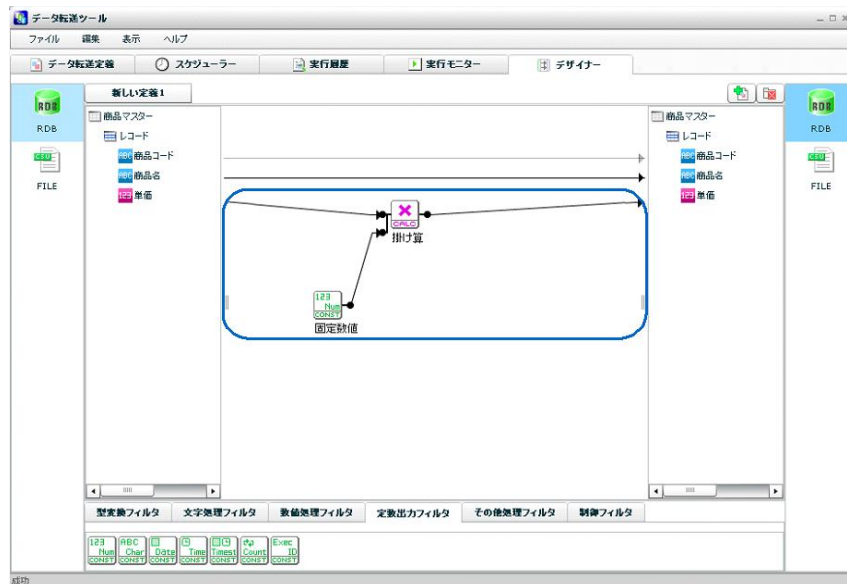


次に[数値処理フィルタ]タブから、[掛け算]フィルタを選択し、同様にドラッグ&ドロップし、画面中央付近に配置します。



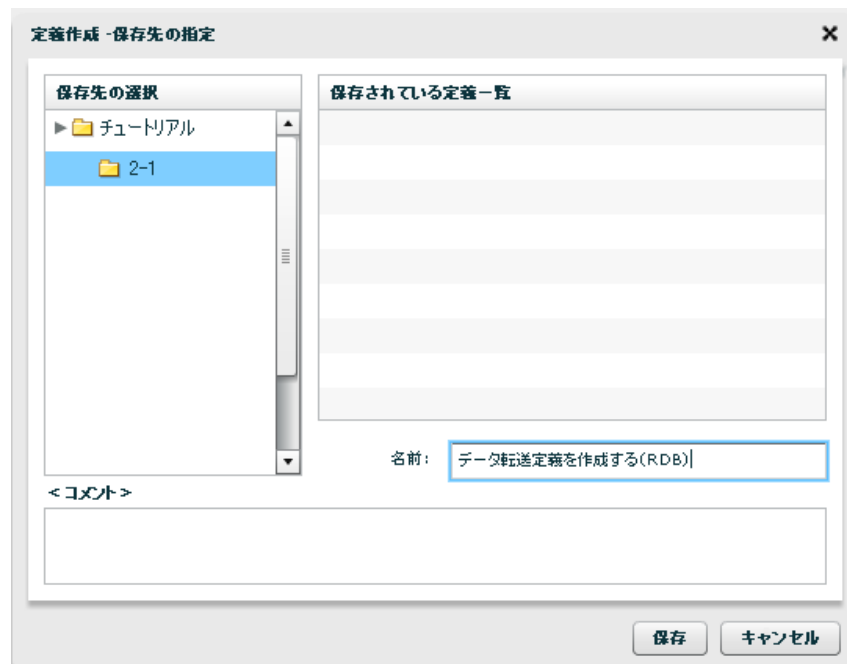
入力元の単価フィールドと、固定数値フィルタをそれぞれ掛け算フィルタにドラッグ&ドロップしお互いを結線（マッピング）します。

そして、掛け算フィルタを出力先の単価フィールドに対してマッピングすることで 5%を乗じた値を出力先の単価フィールドにセットすることができます。



手順5： データ転送定義を保存します

メニューバーの[ファイル]→[名前を付けて保存]をクリックします。次の画面のように保存先を選択し[名前]欄に定義名称、[コメント]欄にその定義の説明を入力し[保存]をクリックします。

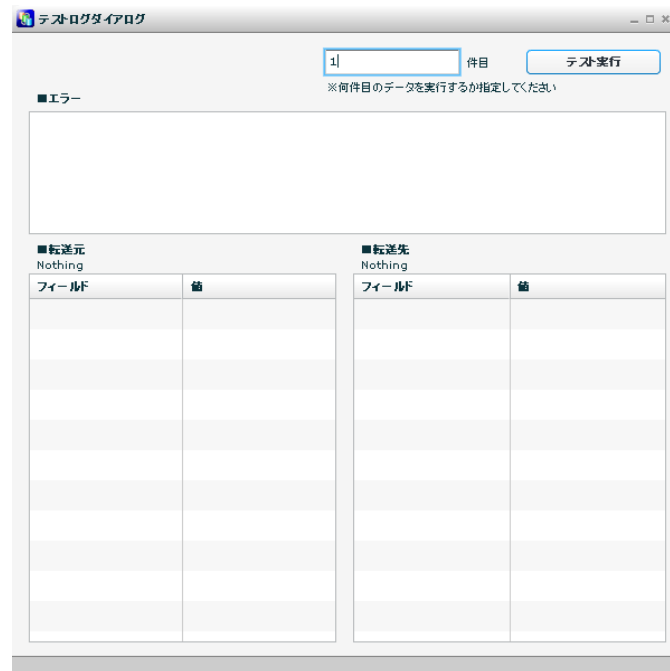


手順6: データ転送定義の検証をします

データ転送定義をテスト実行します。

保存を終えたらテスト実行機能を利用し、エラーなく正常に動作することを確認します。

メニューバーの [表示] → [テストログダイアログ] をクリックします。



テスト実行に利用するデータを指定し、[テスト実行] ボタンをクリックします。

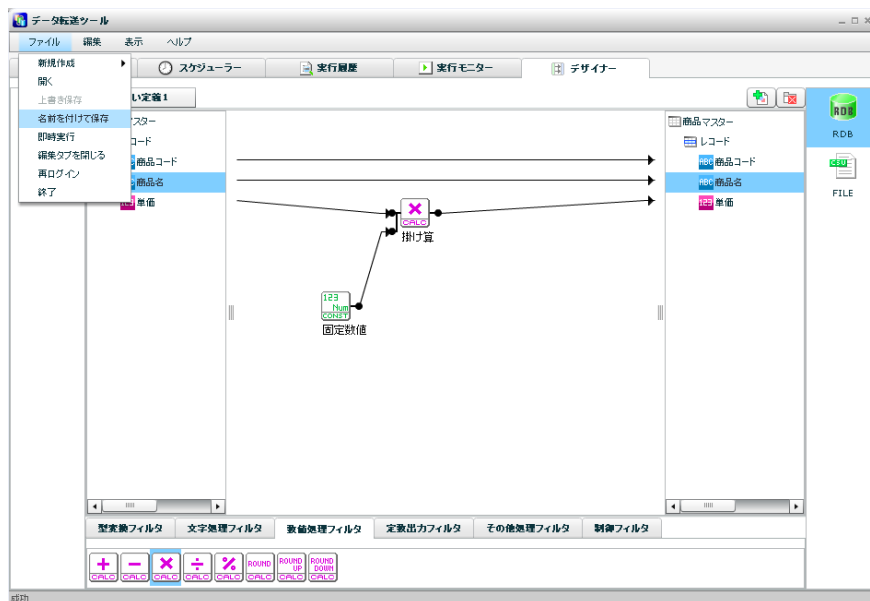
画面下部のデータ表示部に結果が表示されることを確認します。

❗ [エラー] 欄に赤字でエラー内容が表示される場合、データ転送定義に誤りがあるか、または存在しないデータを指定している場合があります。

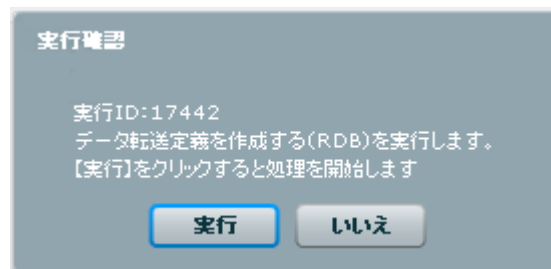
❗ テスト実行では出力先リソースは更新されません。

手順7: データ転送定義を実行します

先ほど作成/保存した定義を画面のように開いた状態でメニューバーの[ファイル]→[即時実行]をクリックします。



実行確認画面では[実行]をクリックし実行を開始します。



西日本 DB データベースの商品マスターテーブルを参照し、結果を確認します。

東日本 DB の商品マスターテーブルの各商品データと、それぞれ 5%だけ高く設定された単価が表示されているはずです。

2-2: データ転送定義を作成する(File)

File リソースに対してデータの読み取り/書き込みを行うデータ転送定義の作成を習得します。

読取ったデータはフィルタを利用してデータの加工を行った後、対象の File リソースへ更新します。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none">File リソースを利用しデータの読み書きをするフィルタを利用してデータ加工をする	<ul style="list-style-type: none">データ転送定義

● 事前修了しておきたい実習項目

ありません。

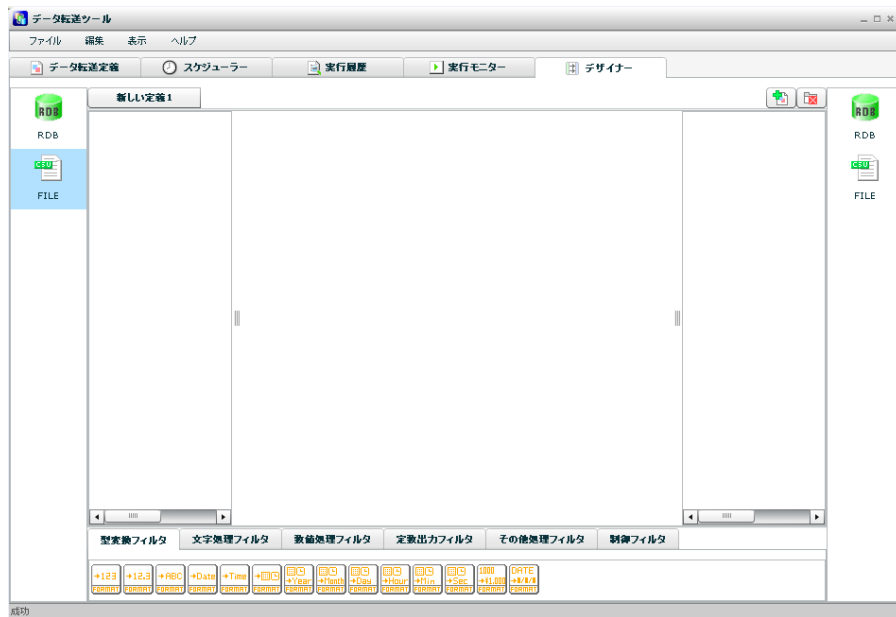
● 実習のシナリオ

“東日本 CSV” フォルダの“店舗情報” ファイルからデータを読み込み、

“西日本 CSV” フォルダの“店舗情報” ファイルへデータを新規挿入します。

商品マスターには単価フィールドがありますが、西日本では東日本より 5% 高く設定します。

作成したデータ転送定義を保存し手動で実行します。

手順1: DatamartTool を起動し [デザイナー] タブを選択します。

入力元（データ読み込み側）と出力先（データ書き込み側）には FILE を利用します。

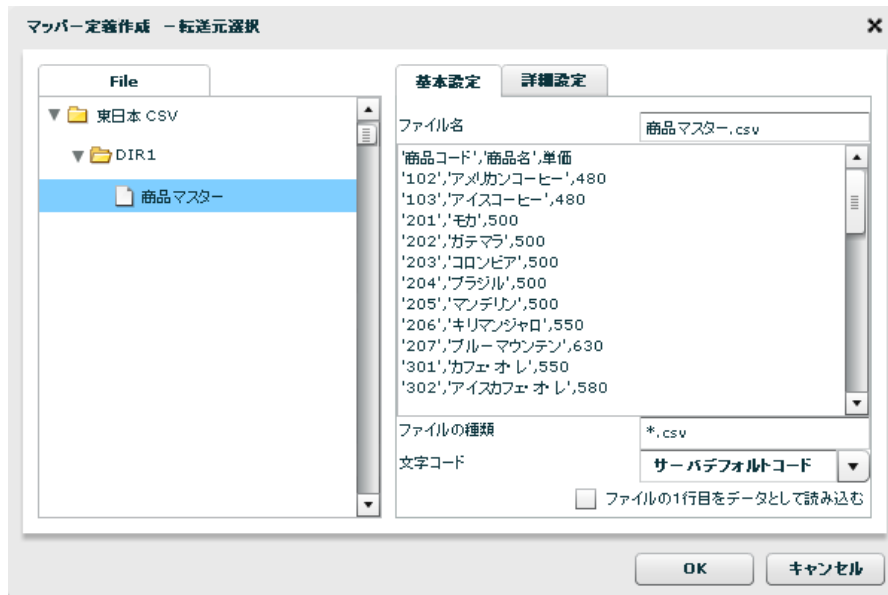
まず、入力元ではデータの読み込み先であるファイルの一つを選択します。

手順2: FILE リソースから入力元ファイルを選択します

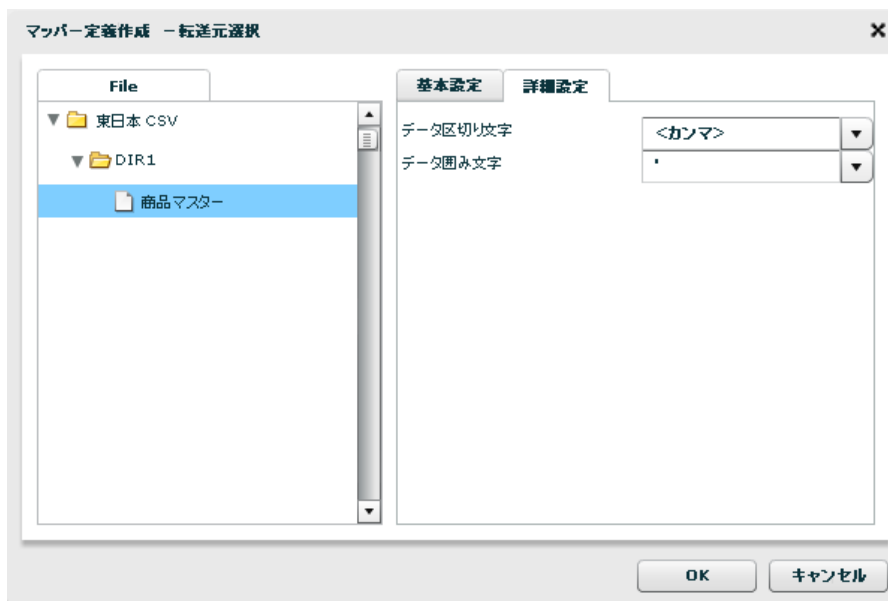
[FILE]と書かれたアイコンを右クリックし[CSV ファイル選択]をクリックします。

表示されているフォルダから目的のファイルを選択します。右側にはプレビューが表示され、データの区切り文字や囲み文字を確認します。

CSV ファイルにヘッダー行が含まれる場合は [ファイルの一行目をデータとして読み込む] からチェックを外します。



[詳細設定] タブをクリックし、先ほど確認したデータ区切り文字や囲み文字を指定します。



[OK] ボタンをクリックし転送元選択画面を閉じます。

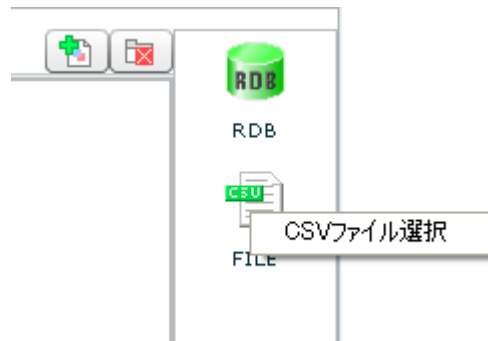
❗ データ区切り文字や囲み文字がコンボボックスの一覧にない場合、任意の文字を入力することで別の文字を指定することができます。

手順3： FILE リソースから出力先ファイルを選択します

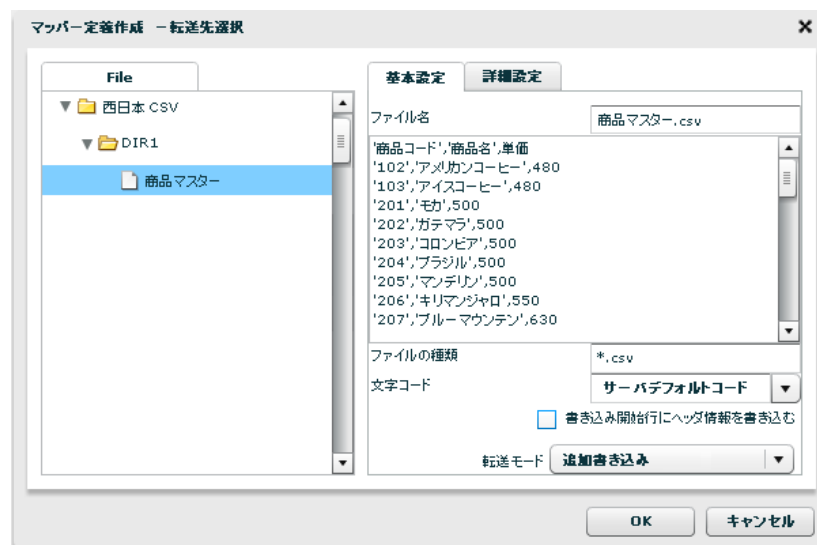
データの出力先ファイルを選択します。

手順2では“東日本 CSV” からデータを読み込むよう設定しました。手順3では出力先として“西日本 CSV” に取得したデータを転送するように指定します。

画面右側の[FILE]アイコンを右クリックし[CSV ファイル選択]をクリックします。



[転送先選択]画面で“西日本 CSV” フォルダから“商品マスター” テーブルを選択し転送先ファイルを指定します。

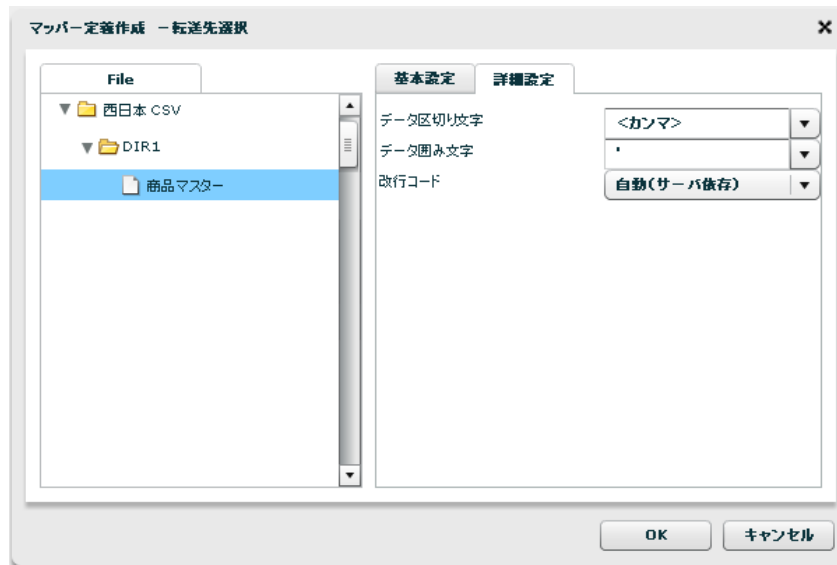


この実習では西日本 CSV フォルダに既に存在する商品マスターファイルに追加書き込みします。

ヘッダ情報は不要になるため、[書き込み開始行にヘッダ情報を書き込む]のチェックを外します。

[詳細設定]タブをクリックしデータ区切り文字と囲み文字を指定します。

では、転送モードを指定します。この実習では[インサート/アップデート]を選択します。

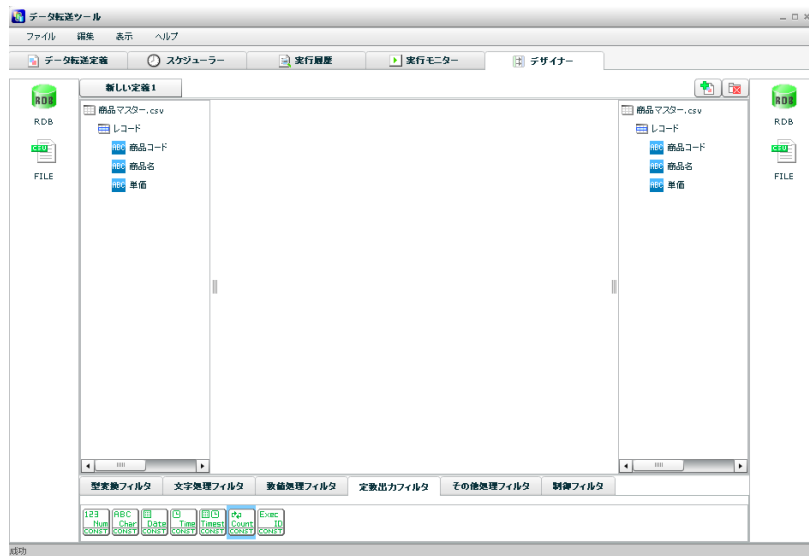


❗ データ区切り文字や囲み文字がコンボボックスの一覧にない場合、任意の文字を入力することで別の文字を指定することができます。

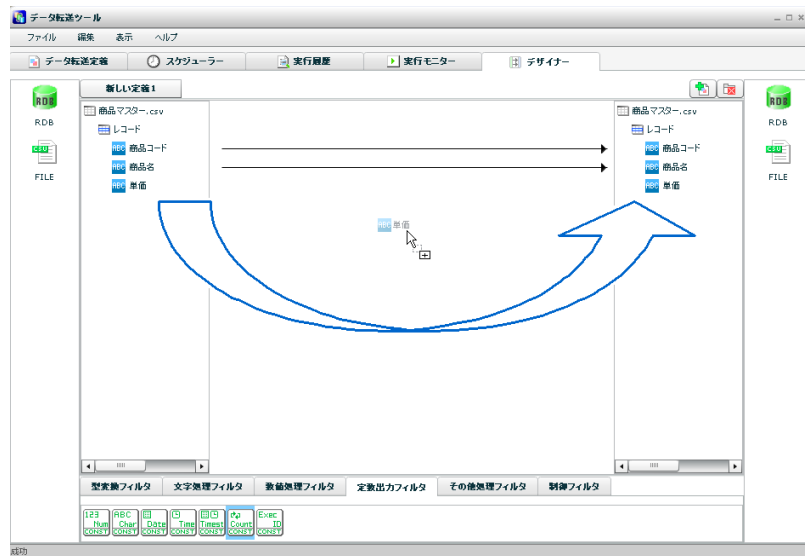
[OK] ボタンをクリックし転送先選択画面を閉じます。

手順4： データマッピングをします

入力元と出力先のそれぞれのデータフィールドをつなぎ、データ転送設定をします。



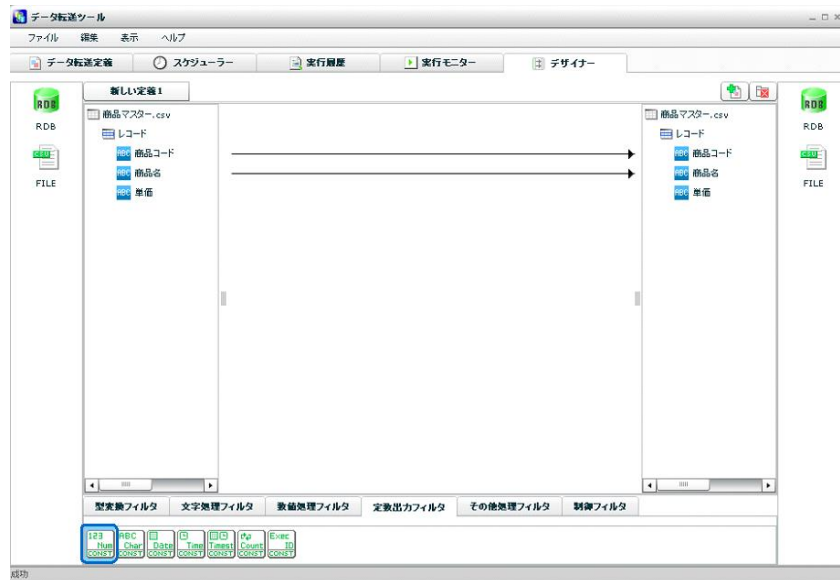
この実習では“東日本 CSV の商品マスターファイル” から“西日本 CSV の商品マスターファイル”へデータを転送することです。そのためには画面左側のフィールドを、右側の同名のフィールドに対してマウスでドラッグ&ドロップしマッピングを一つひとつ作成します。



単価フィールドは西日本のほうを5%高く設定したいため、東日本 CSV の商品マスターの単価にその分上乘せた値を、西日本 CSV の商品マスターの単価フィールドにマッピングします。

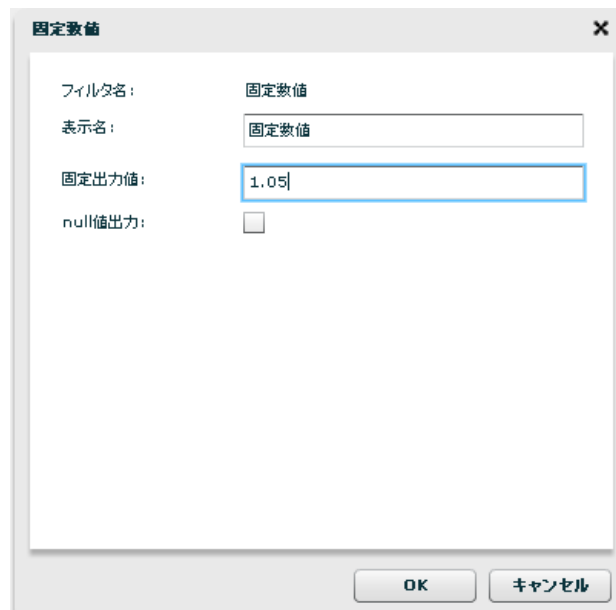
このマッピングには“5%”という値を持たせた固定数値フィルタと、掛け算フィルタを利用し表現します。

まず、画面下部の[定数出力フィルタ]タブを選択し、[固定数値]フィルタを画面中央のキャンバスにドラッグ&ドロップします。

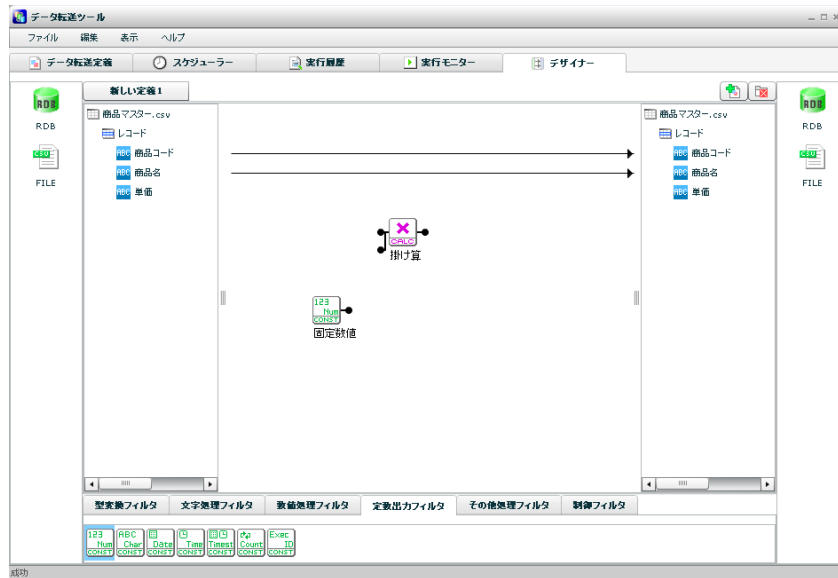


[固定数値]フィルタを配置すると次のようなプロパティ画面が表示されます。

[固定出力値]欄に5%である“1.05”と半角で入力し、[OK]をクリックします。

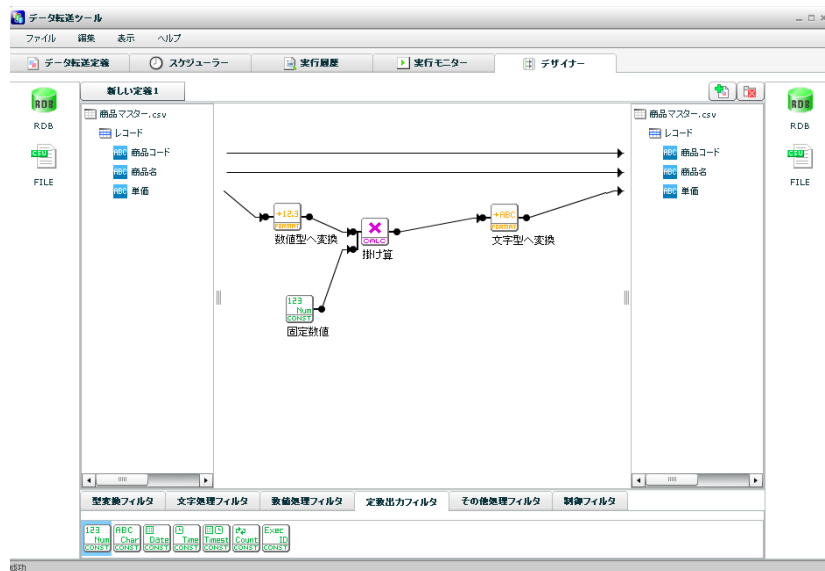


次に[数値処理フィルタ]タブから、[掛け算]フィルタを選択し、同様にドラッグ&ドロップし、画面中央付近に配置します。



入力元の単価フィールドと、固定数値フィルタをそれぞれ掛け算フィルタにドラッグ&ドロップしお互いを結線（マッピング）します。

そして、掛け算フィルタを出力先の単価フィールドに対してマッピングすることで 5%を乗じた値を出力先の単価フィールドにセットすることができます。



FILE リソースでは各データフィールドを文字型として扱うため、整数型への変換フィルタが自動で挿入されます。

手順5： データ転送定義を保存します

メニューバーの[ファイル]→[名前を付けて保存]をクリックします。次の画面のように保存先を選択し[名前]欄に定義名称、[コメント]欄にその定義の説明を入力し[保存]をクリックします。

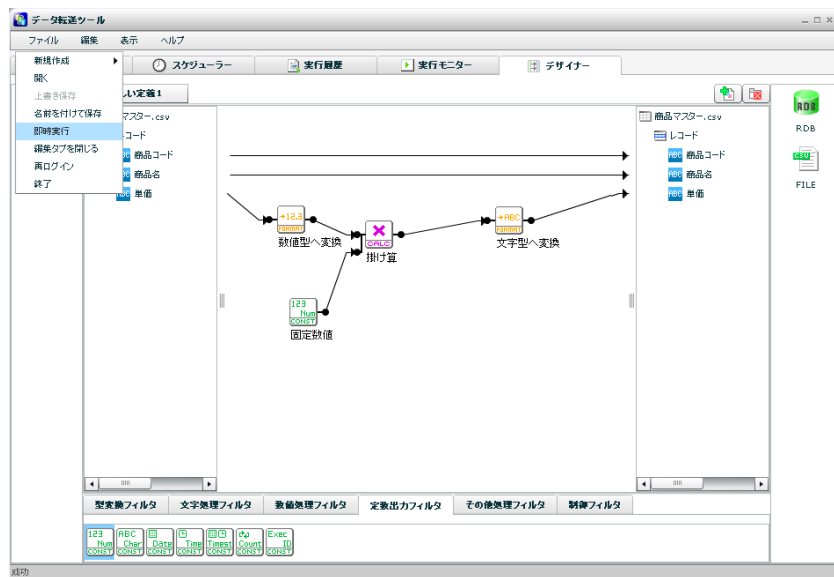


FILE リソース利用時でもテスト実行を利用することができます。

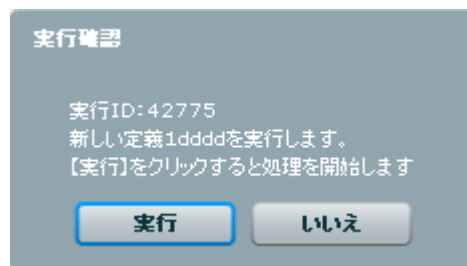
チュートリアル『2-1：データ転送定義の作成（RDB）』を参照してください。

手順6： データ転送定義を実行します

先ほど作成/保存した定義を画面のように開いた状態でメニューバーの[ファイル]→[即時実行]をクリックします。



実行確認画面では[実行]をクリックし実行を開始します。



西日本 CSV フォルダの商品マスターファイルを参照し、結果を確認します。

東日本 CSV フォルダの商品マスターファイルの各商品データと、それぞれ 5%だけ高く設定された単価がファイルの末尾に追加されていることを確認します。

第 3 章

第 3 章 一応用編一

3-1:オリジナルテーブルを作成する

テーブル作成機能を利用することで、データ転送先を作成することができます。

この機能を利用することで RDB に詳しくないユーザーも簡単にテーブル作成でき、データ転送先に利用することができます。

目的	作成されるもの
・ RDB を指定し新たにテーブル作成をする	・ データ転送定義 ・ データベーステーブル

● 事前修了しておきたい実習項目

2-1 : データ転送定義を作成する (RDB)

● 実習のシナリオ

『2-1 : データ転送定義を作成する (RDB)』で作成したデータ転送定義を編集します。

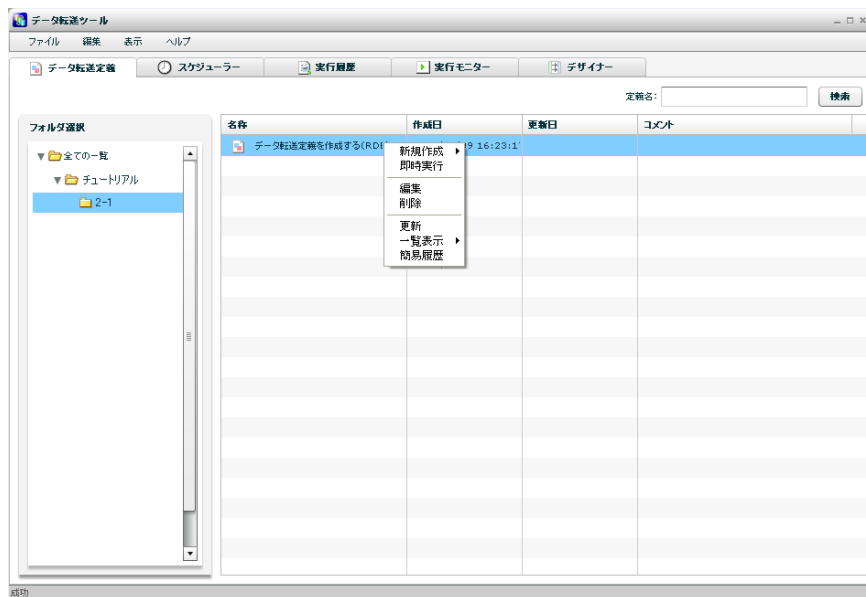
出力先リソースに指定されている西日本 DB の“商品マスター”テーブルを外し、新たに“在庫情報”テーブルを作成します。

在庫情報テーブルの主キーは商品コードとし、在庫フィールドには既定値として在庫数 100 を指定します。

また、この実習では実行時にトランザクションと障害発生時についての転送オプションを指定します。

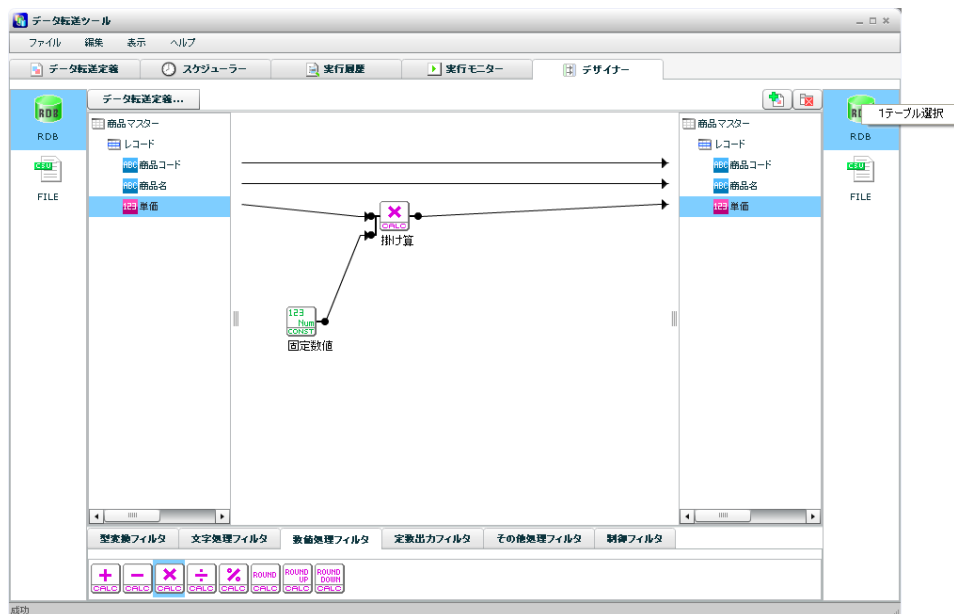
手順1： データ転送定義を選択し編集します

[データ転送定義]タブをクリックし『2-1：データ転送定義を作成する（RDB）』で作成したデータ転送定義を右クリックし[編集]をクリックします。



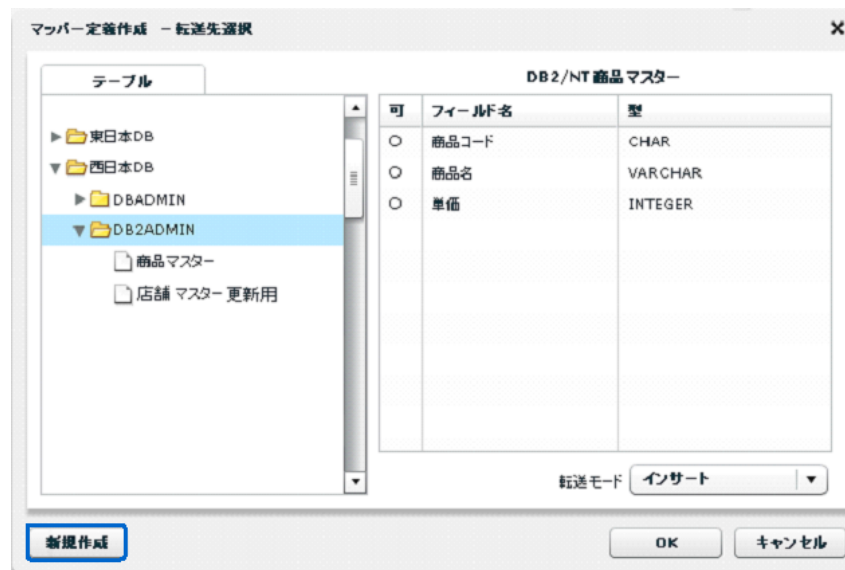
手順2： 作成するテーブル情報を入力します

データ転送定義が復元されます。出力先リソースの[RDB]を右クリックし[1 テーブル選択]をクリックします。

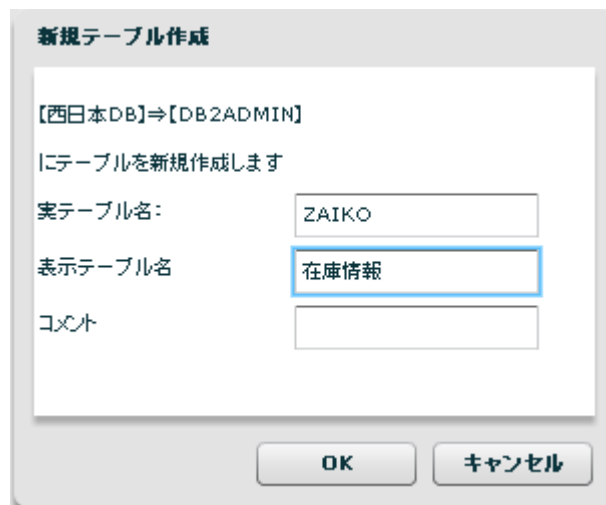


転送先選択画面が表示されます。

商品マスターテーブルのスキーマである[DB2ADMIN]と書かれたフォルダアイコンをクリックし、画面左下の有効になった[新規作成]ボタンをクリックします。

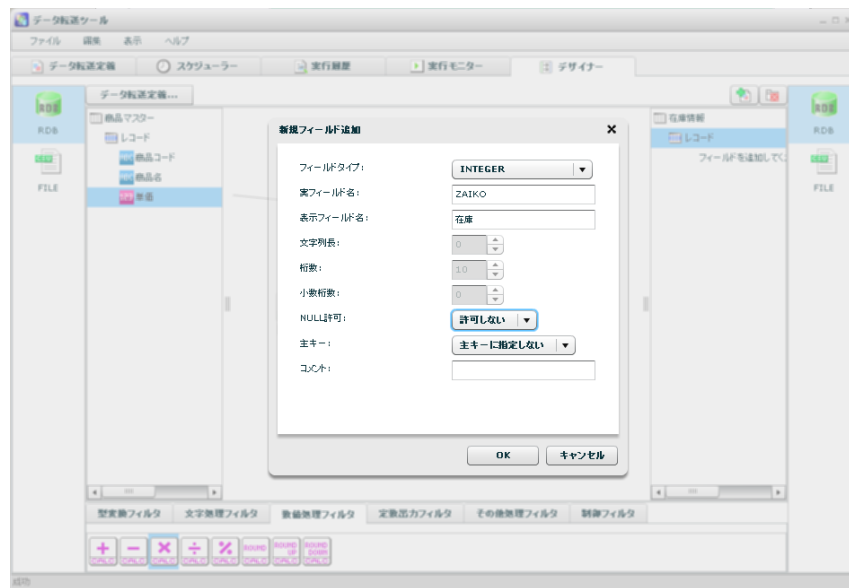


新規テーブル作成画面では、実テーブル名と画面上に表示される表示テーブル名を入力し[OK]ボタンをクリックします。

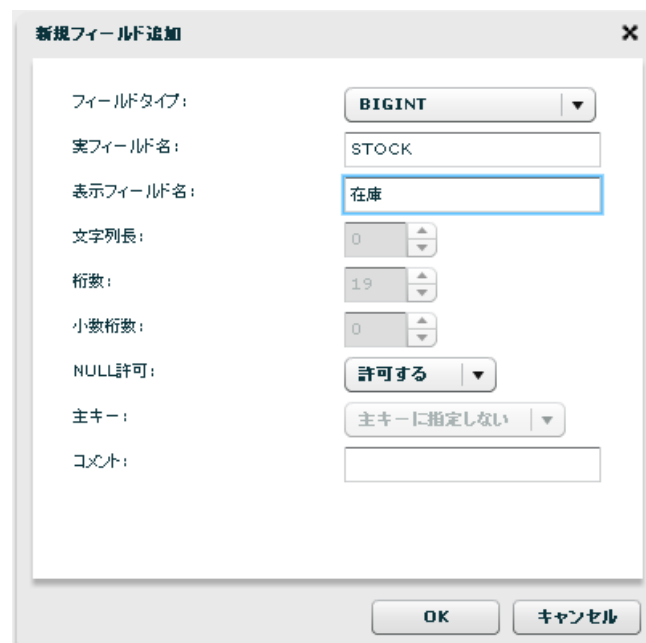


デザイナー画面に戻り、出力先テーブル情報がクリアされた代わりに[在庫情報]と表示されます。

[在庫情報]の[レコード]を右クリックし表示されたメニューから[フィールドを追加する]をクリックします。



新規フィールド追加画面では次のように実フィールド名と表示フィールド名を入力します。



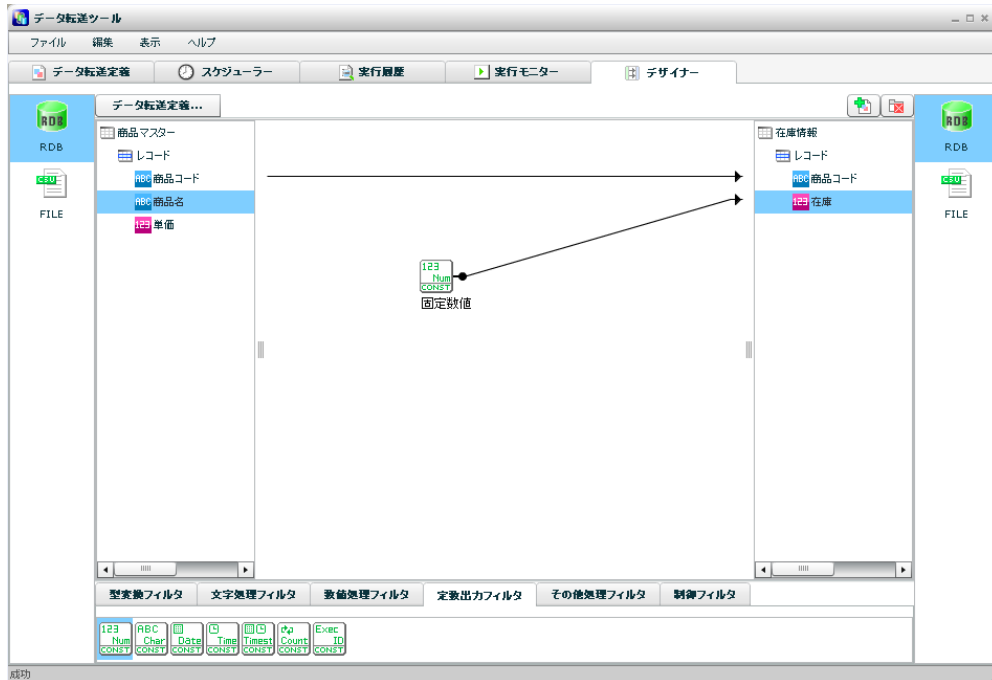
次のフィールドを出力先に追加します。

- ・ 商品コード（文字型）
- ・ 在庫（数値型）

手順3： 各フィールドをマッピングします

画面以上に追加された出力先の各フィールドに、それぞれ対応する入力元フィールドをマッピングします。

キャンバス上に[固定数値]フィルタを配置し、そのプロパティ[固定出力値]に 100 を指定し在庫フィールドにマッピングします。



データ転送定義を保存した時点ではじめて在庫情報テーブルが作成されます。テーブル作成に関わる各種制約はRDBの仕様に従います。

手順4： 転送オプションを指定します

ツールバーの[編集]→[転送オプション]をクリックします。

転送オプション設定

<障害発生時>

問題が発生したら直ちに停止し、処理を終了する

問題が発生したデータをスキップして、次のデータの処理を開始する

<転送モード>

リプレイス

出力リソースのレコードを全削除した後、レコードをインサートします

<トランザクション>

指定しない

指定する

OK キャンセル

転送元が商品マスターとはいえ、在庫情報テーブルへのデータ転送です。処理中にエラーが発生した場合に備えデータの一貫性についても考慮すべきです。

この場合、『転送障害が発生した場合、その処理は無効とし処理前の状態に戻す』のが良いでしょう。

これを転送オプションで次のように指定します。

- ・[障害発生時] : **問題が発生したら直ちに停止し、処理を終了する**

→更新データまたはシステムにエラーが発生した場合以降の処理を行いません。エラーを記録します。

- ・[トランザクション] : **指定する**

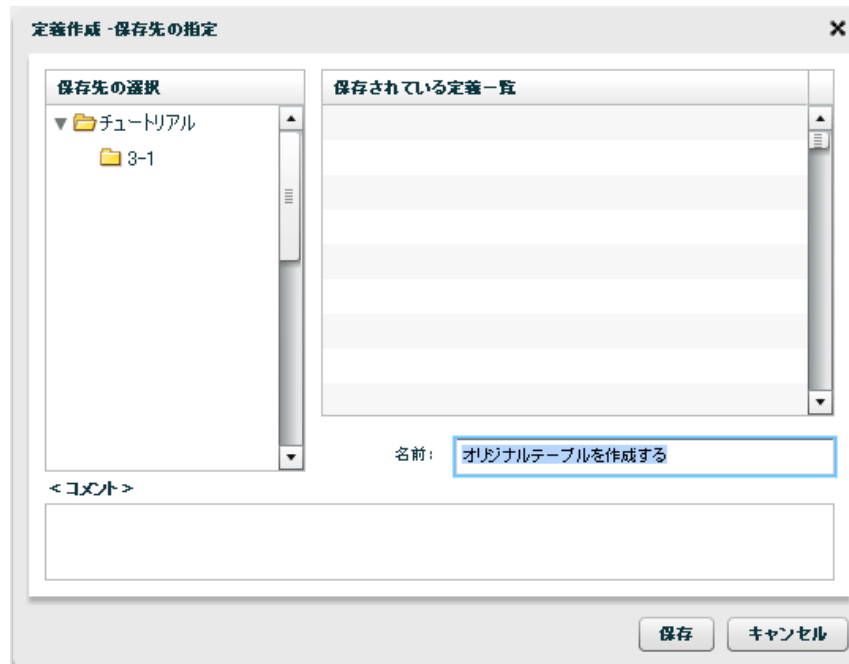
→処理とともにトランザクションが開始されます。エラーが記録され処理が停止した場合、ロールバックを行い、処理前の状態に戻します。



[障害発生時]を **問題が発生したデータをスキップして、次のデータの処理を開始する** を選択し、[トランザクション]を **指定する** にした場合、エラーは全て無視されるためロールバックが起こることはありません。

手順 5： データ転送定義を保存し実行します

データ転送定義名を入力し[保存]ボタンをクリックします。



在庫情報テーブルは保存が完了した時点で対象のデータベースに作成されます。

保存後、データ転送定義『オリジナルテーブルを作成する』を実行します。新しく作成された在庫情報テーブルには入力元からの商品データと在庫数 100 がセットされていることを確認できることでしょう。

3-2:オリジナルファイルを作成する

ファイル作成機能を利用することで、新規に CSV ファイルを作成することができます。

目的	作成されるもの
・フォルダを指定し新たに CSV ファイル作成をする	・データ転送定義 ・新規 CSV ファイル

● 事前修了しておきたい実習項目

2-2 : データ転送定義を作成する (FILE)

● 実習のシナリオ

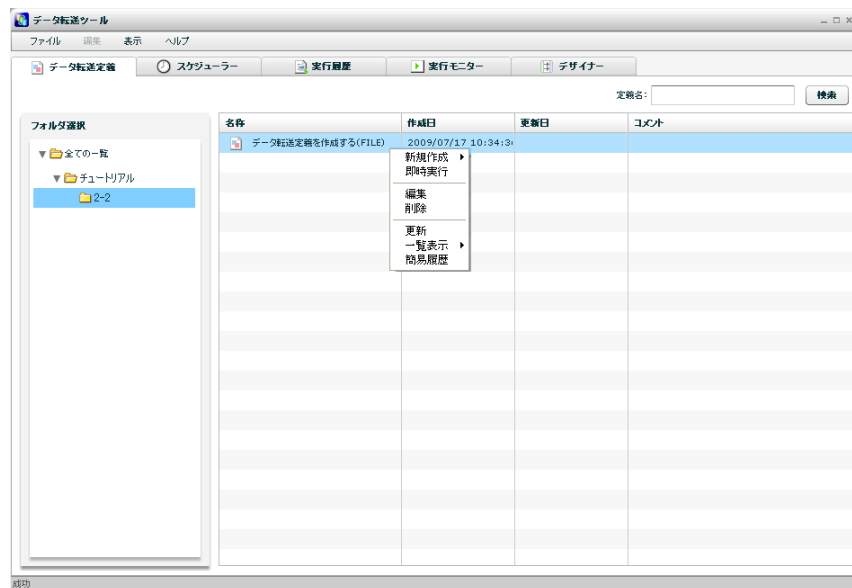
『2-2 : データ転送定義を作成する (FILE)』で作成したデータ転送定義を編集します。

出力先リソースに指定されている西日本 CSV フォルダの“店舗情報”ファイルを外し、新たに“支店情報”ファイルを作成しデータを転送します。

また、この実習ではデータ転送定義の“実行前と実行後”に処理を指定するための“前後処理”を指定します。

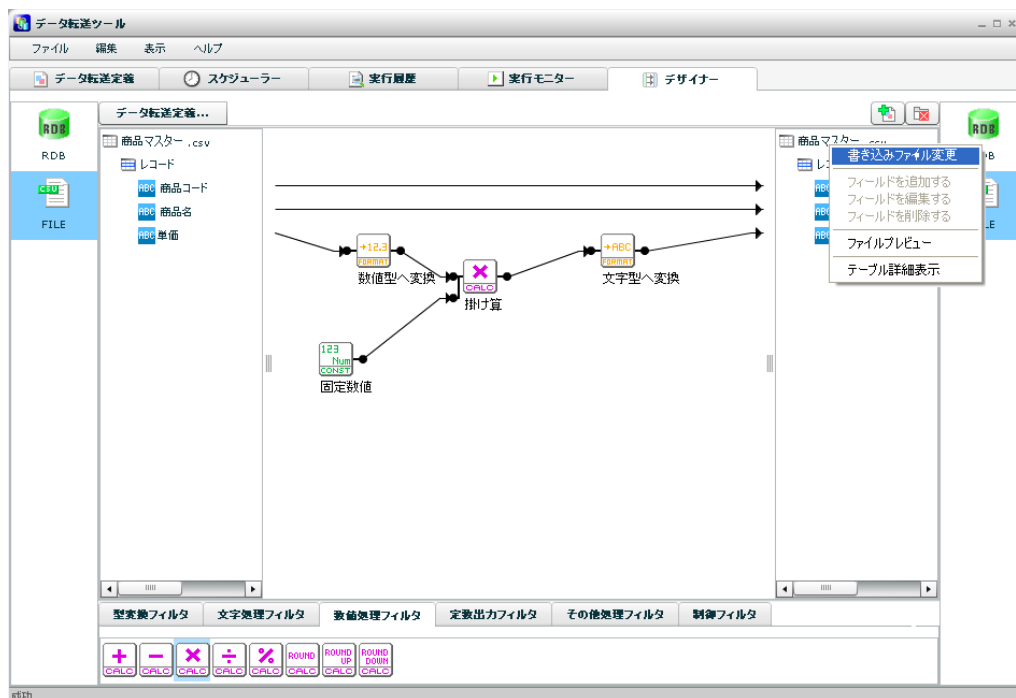
手順1: データ転送定義を選択し編集します

[データ転送定義]タブをクリックし『2-2: データ転送定義を作成する (FILE)』で作成したデータ転送定義を右クリックし[編集]をクリックします。



手順2: ファイル名を変更します

データ転送定義が復元されます。出力先リソースの[商品マスター.csv]を右クリックし[書き込みファイル変更]をクリックします。

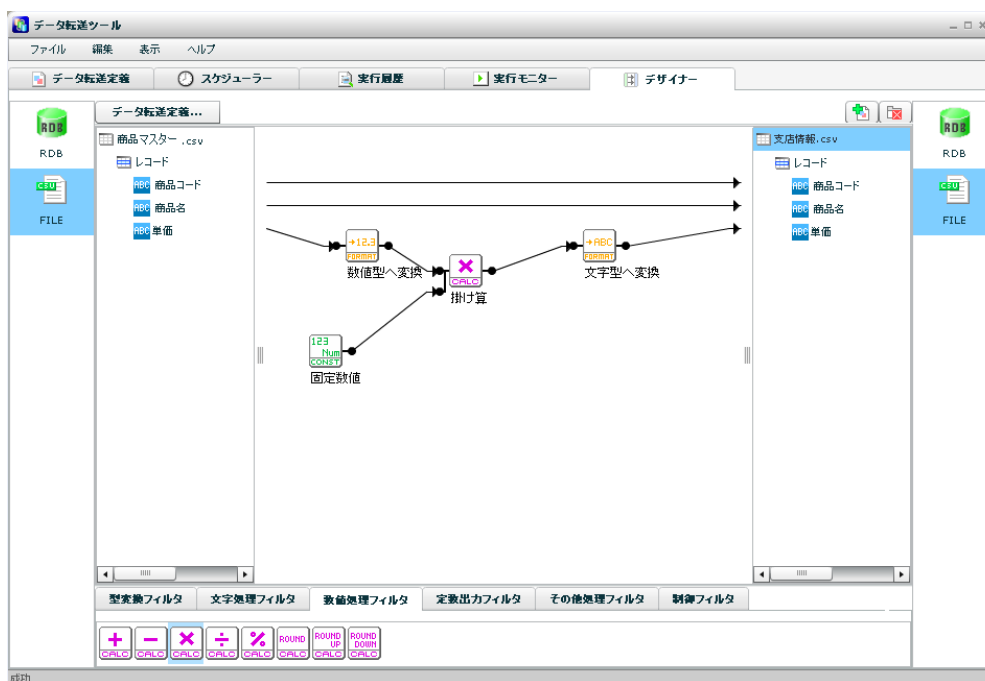


書き込みファイル変更画面が表示されます。

新たに作成したいファイル名を入力し、[OK]ボタンをクリックします。



デザイナー画面に戻り、出力先ファイル名が[支店情報.csv]と表示されます。



手順3： 前後処理を指定します

メニューバーの[編集]→[前後処理]をクリックします。

前後処理では、データ転送定義を実行する前に実施する“前処理”と、実行した後に実施する“後処理”の二つに分かれます。

この実習では後処理を実行させます。

[後処理]タブをクリックし、画面上部の[有効にする]にチェックを付けます。

[コマンド]には本製品サーバー上で実行するコマンドを入力します。

例えば、次のように日付でファイル名をリネームするようなバッチファイルが『rename.bat』という名称であるとします。

```
set yy=%date:~0,4%
set mm=%date:~5,2%
set dd=%date:~8,2%

copy c:\qanat\csv\コピー元.csv c:\qanat\out\%yy%_%mm%_%dd%.csv
```

『rename.bat』を本製品サーバーと同じ Windows 環境の、C ドライブ直下に配置した場合、[コマンド]欄には次のように入力します。

```
C:\rename.bat
```

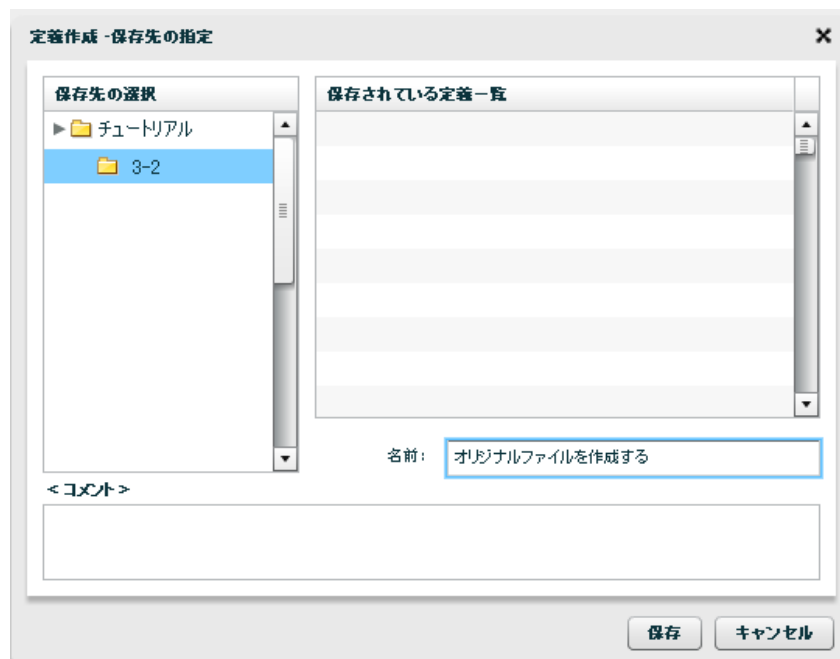
[コマンド戻り値]には任意の値を入力します。

これは次のそれぞれのチェックボックスのうちどちらを選択するかにより本製品サーバーの解釈が異なります。

- ・ [障害発生時]をチェックした場合
→コマンド実行の結果、入力した任意の値が返された場合は「障害」と判断されます。
- ・ [成功時（他の値が戻った場合は障害）]をチェックした場合
→コマンド実行の結果、入力した任意の値が返された場合は「処理成功」と判断されます。

手順4： 保存し実行します

データ転送定義を保存します。



データ転送定義名を入力し[保存]ボタンをクリックします。

支店情報ファイルは保存が完了した時点で対象のフォルダに作成されます。

保存後、データ転送定義『オリジナルファイルを作成する』を実行します。新しく作成された支店情報ファイルには入力元からの店舗情報がセットされていることを確認できるでしょう。

さらに、後処理が有効であるためコマンドが実行され、その結果新たなファイルが生成されていることも確認することができます。

3-3: スケジュールを作成する

これまで作成した複数の異なるデータ転送定義は一つのタスク定義にまとめ、一つの実行単位にすることができます。

また、データ転送定義や、タスク定義はタイマー起動を指定することで自動実行することができます。

目的	作成されるもの
<ul style="list-style-type: none">・タスク定義を作成する・スケジュール実行を作成する	<ul style="list-style-type: none">・タスク定義・スケジュール

● 事前修了しておきたい実習項目

2-1 : データ転送定義を作成する (RDB)

2-2 : データ転送定義を作成する (FILE)

● 実習のシナリオ

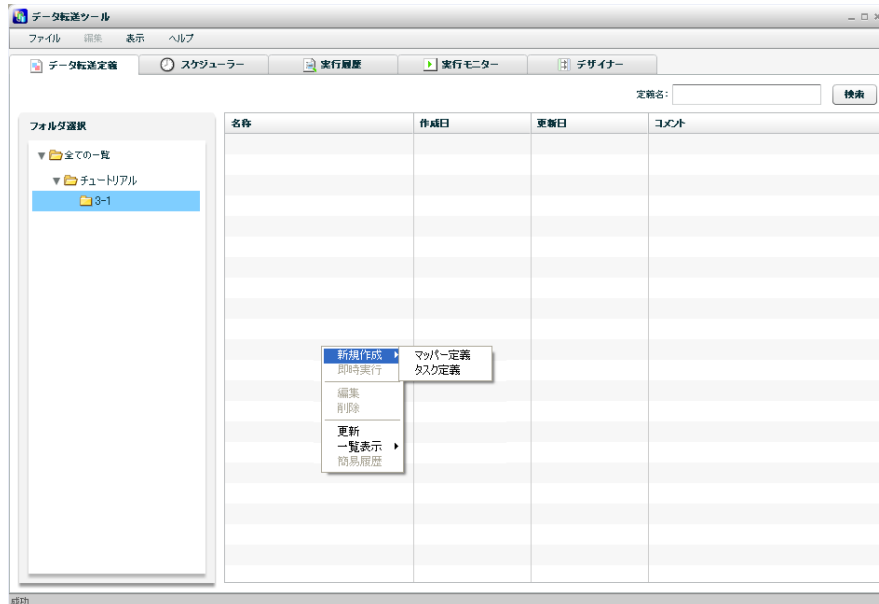
まず、二つのデータ転送定義を含めたタスク定義を一つ作成します。

作成したタスク定義は決められた日時で自動実行するようにスケジュール実行を指定します。

手順1: タスク定義を作成します

タスク定義では、複数のデータ転送定義を一つの意味のある実行単位にまとめ、一度の実行でそれら複数のデータ転送定義を順序を指定して実行します。

右クリックメニューの[新規作成]→[タスク定義]をクリックします。



タスク定義作成では、まとめたい定義を保存先フォルダから選択し[追加]ボタンをクリックします。

データ転送定義と同様に障害発生時とトランザクション指定が行えます。

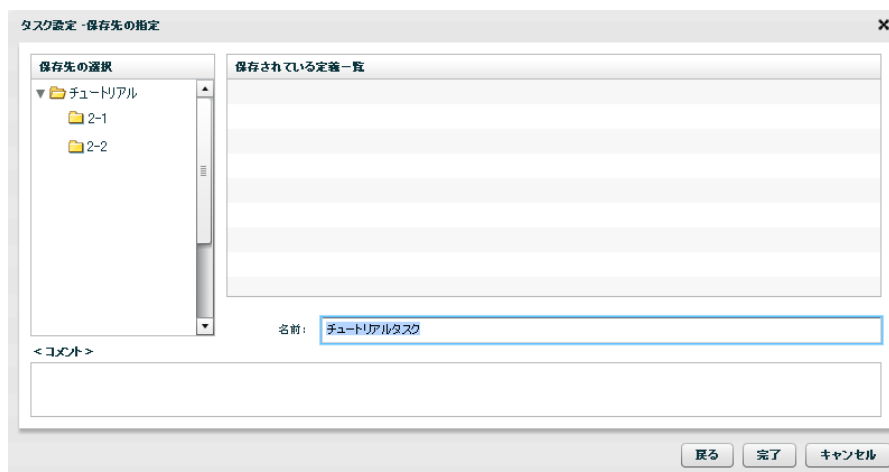


[次へ]ボタンをクリックし保存先の指定と名前を入力します。



トランザクション指定では出力リソースが異なる今回のチュートリアルのような場合は指定することができません。

[完了]をクリックし保存します。

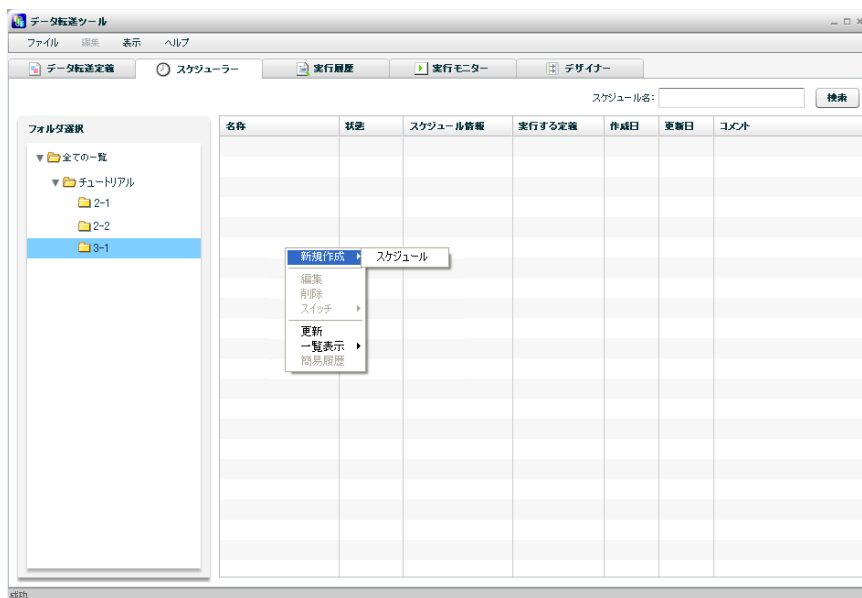


次に、作成した『チュートリアルタスク』をスケジュール実行します。

手順2: スケジュール定義を作成します

[スケジューラー]タブを開きます。

画面の空白箇所でも右クリックしメニューから[新規作成]→[スケジュール]をクリックします。



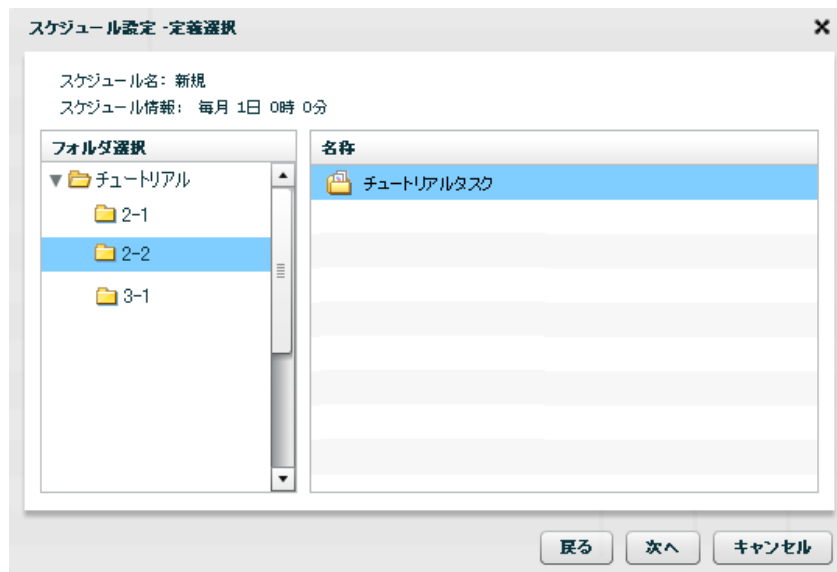
実行タイプ画面では自動実行するタイミングを指定します。

この実習では『毎月 1 日の午前 0 時』を指定します。

[次へ]をクリックします。

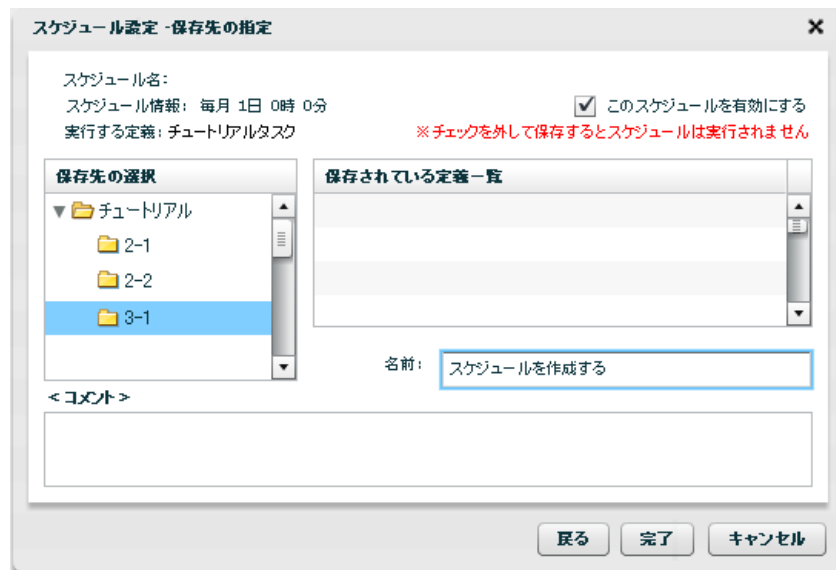


実行させたい定義を選択し、[次へ]をクリックします。

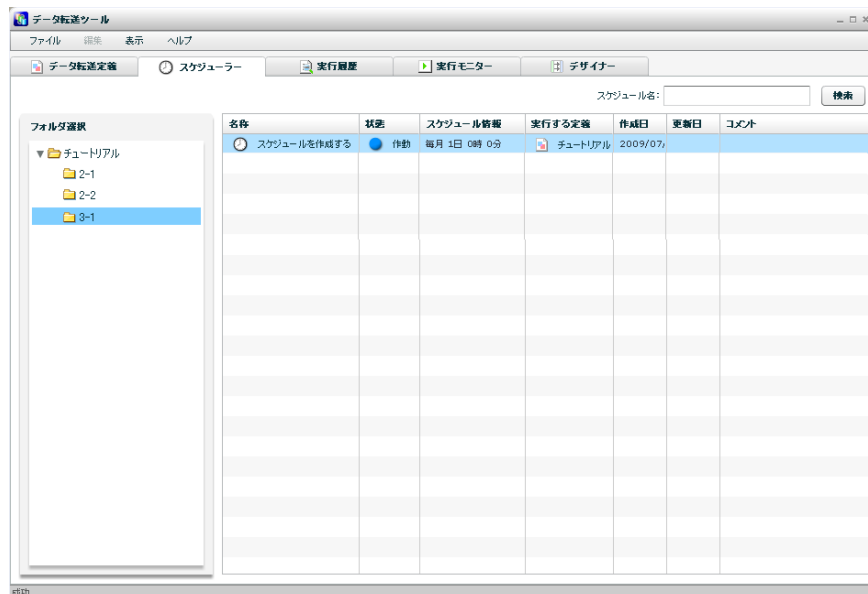


スケジュール名を入力し保存先を指定します。

[完了]をクリックします。このとき画面上部の[このスケジュールを有効にする]をチェックします。



保存後、スケジューラタブの一覧画面で作成したスケジュール定義が有効となっていることを確認します。



決められた日時に指定されたデータ転送定義が実行されます。

Datamart for WebReport2.0 チュートリアル

第 1 版 2009 年 7 月 29 日

発行 日本ビジネスコンピューター株式会社

〒144-8721 東京都大田区蒲田 5 丁目 37 番 1 号ニッセイアロマスクエア 15 階
TEL.(03) 5714 - 5124

お問い合わせ 弊社ホームページより、お問い合わせください。
<http://www.jbcc.co.jp/>

本書は著作権上の保護を受けており、本書の全部あるいは一部に関して、日本ビジネスコンピューター株式会社からの文書による許諾を得ず、無断で複写、複製することは禁じられています。また、本書はユーザーへ通知することなく変更される場合があります。

jBCC 日本ビジネスコンピューター株式会社

資料番号:XXXXXXXX